

「ケガレトリ」

一

「葵、こういう噂知ってる？」

放課後の教室。窓から夕日が射し込む。

私はシャーペンを指の上で転がしながら、ぼんやりと美玲の話に耳を傾けた。

「隣町の■■神社。あそこ古い祠があつてさ。そこにスマホを供えて呪文を唱えると、自分の『ケガレ』を清めてくれる神様のアプリが手に入るんだって」

「ケガレ？」

「そう。人間、どんなに清く正しく生きようとしたってやつぱどこか汚れちゃうじゃん」

……それは、そう思う。

無垢で純粋だった子供の頃と比べると今の私は、色々とすす汚れている。

「神様がケガレを全部洗い流してくれるんだ。ほら、よく言うじゃん。デラックス？　みたいな？」

「それを言うならデトックスでしょ。……ていうか怪しすぎない、それ？」

「だよね。まあ、所詮都市伝説だし。わざわざ隣町まで行って試すほど暇じゃないよね」

「だね。……ところで、その呪文って？」

「興味あるんじゃない？」

「一応聞いてみただけ」

「ええとね、確か――」

「『祓ひ給へ、清め給へ、我が穢れを喰らひ給へ』……だって」

「ふーん」

美玲には気のない返事をしたけど正直、心は少し揺れた。

——だって私のなかには『ケガレ』が山ほどあるから。

クラスメイトの佐川ゆきな。何が気に入らないのか、私にばかり嫌がらせをする。

担任の戸塚。授業中、私が間違いを指摘してクラス全員が笑った。それをいつまでも根に持っていて、私にだけ厳しい。

お父さんの怒鳴り声。すぐ怒るし、すぐ怒鳴る。お母さんは怖がって逆らえない。家は安心できる場所じゃない。

悲しい。ムカつく。恨めしい。うんざり。じわじわした色んな感情が私の胸で渦巻いている。

このイヤな感情は私の中に沈殿していく。消化されず、どんどんどんどん、溜まっていく。

「葵、行くの？」

「行かないよ」

「えー、試してほしかったのになー」

「人を実験台にしないでよ」

私たちは笑って、その話はそれで終わった。

二

――その夜。私は隣町にむけて自転車を漕いでいた。

「……ここだ」

神社は思っていたよりずっと小さくて、暗かった。

街灯のない参道。スマホのライトを頼りに歩く。砂利を踏む音だけが響く。

木々のざわめき。湿った苔の匂い。

ここだけひんやりと空気が冷たい。腕に鳥肌が立つ。

……やっぱり帰ろうかな。そんな気持ちで首をもたげる。

いや、せっかく隣町までやってきたんだ。パパッと試して、何もなければそれでいい。早々に引き上げよう。足早に参道を進む。

奥には、古くて小さな建物があった。――祠だ。

木は黒ずんでいる。扉の彫り物は半分剥げている。蜘蛛の巣が屋根の縁から垂れていた。

扉の隙間に目を寄せて、中を覗き込む。

それは、奥にぽつんと安置されていた。……真つ白な白木の人形。

荒削りで目も鼻も口もない。四角いこけしのような簡素な姿。両手両足を大の字に広げて無防備に座っている。

表情はないが、なんだか優しそうに見えた。

私はスマホを取り出して祠の前にそっと置いた。

両手を合わせる。

「祓ひ給へ、清め給へ、我が穢れを喰らひ給へ」

——シャラン。鈴の音が、どこからともなく響いた。

ぞくりと背筋が震えた。

スマホを見ると——見覚えのないアプリが。

『ケガレトリ』。

「うそ。ほんとに入った……？」

タップすると、細かい文章がずらりと表示される。よくある、『規約に同意しますか』的なやつ。

この手のやつは、同意しないと先に進めない。最終行まで高速スクロール。

……最後の一行だけ、なぜか目に止まった。

「『完全に清められし御魂は、神となります。是非ともご精進ください……?』」

「神?」

くすつと笑ってしまった。

「私が神様になる? 崇められる存在になれるってこと?」

「悪くないじゃん」

私は「同意する」をタップした。

同意を押すと、画面が切り替わった。

——え。

そこには、私のケガレが一覧になって並んでいた。

《佐川ゆきな いじめ》《担任戸塚 不当評価》《父 怒鳴り声》《自分の顔 コンプレックス》。

見覚えのある名前と、見透かされなくなかった痛みが、墨で書かれている。

「……なんで、知ってるの？」

画面の下に、静かな問いが浮かんだ。

『これらを全て祓いますか？』

私は息をのんだ。

でも迷ったのは、一瞬だけだった。

私は「はい」を押していた。

「……………はぁ……………っ！」

気付くと私は息を止めていた。汗で背中がじつとりと湿っている。

スマホの画面がふっと暗転する。

夜風がひゅうと参道を抜け、木々がざわわと揺れた。

なにも起きない。

「……………バカみたい」

ひとり呟いて、神社を後にした。

翌朝。教室の空気が変わっていた。

席についた瞬間わかった。

誰も私を見ない。

いつもなら佐川ゆきながこっちを見て笑うあの時間。

それがない。ちらりと佐川の席を見る。

——彼女はひとりだった。取り巻きだった子たちが別のグループで笑っている。

たまに佐川のほうを見て目配せしてまた笑う。

昨日までの私が、そこにいた。

「葵、おはよ」

美玲が私の肩をつつきながら挨拶してきた。

「あ……うん。おはよ」

「……佐川、ハブられてんじゃん。ざまあ」

美玲が小声でくすりと笑う。

授業のあいだずっと心臓の音がうるさかった。

——偶然？

——それとも本当にあのアプリのせい？

放課後家に帰ってベッドに座った。

震える指で『ケガレトリ』を開く。

佐川ゆきなの名前に墨で線が引かれていた。

「……………」

ぞわつとした。

でももっと正直に言うなら——スツとした。

胸の奥がふわっと軽くなる。

あの毎朝の教室に入る瞬間の息苦しさをもう味わわなくて済む。

私は画面を見つめる。

その下の三つも……消える？

私の人生を重くしているものが、全部、消える？

そう思った瞬間、喉の奥が熱くなった。

次の日の朝礼。担任の戸塚の急な異動が発表された。

「家庭のご事情で——」

校長の声が体育館にぼそぼそと響く。生徒たちはひそひそと小声で話している。

「えー、なんか急じゃない？」

私はぼんやり聞いていた。

——家庭の事情。本当にそうなのかもしれない。でも……。

その日の夕食の席でお父さんがぼそりと言った。

「シンガポールに行くことになった」

「単身赴任。三年」

「えっ……いつから？」

「来月」

私とお母さんは、思わず顔を見合わせる。

「そう……」

いつもの静かな食卓。でも、家の空気が軽くなるのを感じた。

翌朝。鏡を見て息が止まった。

いつもと変わらない自分の顔。でも、どこかが違う。

私が纏っていた重たい空気が消え、爽やかな風が吹き渡るような、そんな雰囲気纏っている。肌に張りがある。目が生き生きしている。背筋が伸びている。

そしてなにより——気分がいい。

「……おはよう」

私は、無意識に鏡の中の自分に笑いかけていた。

登校すると、すれ違う男子たちが振り返る。

「誰あれ？ あんな子いたっけ？」

「……もしかして田櫻葵？」

「マジ？ あんなかわいかったっけ？」

背中から聞こえるひそひそ声がこそばゆい。美玲も不思議そうに言う。

「葵、なんか雰囲気変わったよね」

「そうかな。……どのへんが？」

「んー、なんだろう……なんか、キラキラしてるみたいな？」

「あははっ、なにそれ」

照れながら答えた。胸がふわふわする。

何も変わっていないのに。全てが変わった気がした。

——気がつけば私の世界は別物だった。

成績は勝手に伸びた。生徒会に推薦された。

自然と声をかけられるようになった。話し方が少し丁寧で、朗らかになった。

ある日、後輩に言われた。

「田櫻先輩、最近なんだか神々しいです」

「大袈裟だよ」

照れながら心の奥で思った。

これが本来の私なんだ。ずっとこうあるべきだった。今までの私は何かに邪魔されていたんだ。

帰り道。

赤い夕焼けに向かって私はふと両手を合わせた。

「ありがとうございます」

「この世のすべてに心から感謝します」

胸の中がしずかに満たされていた。

私の中に、ケガレはもうない。

四

晴れた土曜日の朝。

私はお礼参りに行くことにした。

あの祠にちゃんと感謝を伝えたい。

あの夜と同じように、自転車を鳥居の外に止めて参道に入る。

あの時はあれほど不気味だった神社が今はまるで違う場所だった。

木漏れ日が砂利の上で揺れている。鳥が鳴いている。風が優しくそよいでいる。

——あの夜の私は、どこに行っちゃったんだろう。

くすつと笑って本殿でお賽銭を入れて手を合わせる。

それから奥の祠へ向かった。

祠の前に立ち、小さく頭を下げる。

「ありがとうございました。ケガレトリのおかげで私の人生は変わりました」

声に出して伝える。胸がふわっと温かくなる。

そして——なんとなく扉の隙間に目を寄せた。

——え？

ご神体の人形が黒い。

最初にここに来た夜。覗き込んだとき確かに真っ白だった。

荒削りの白木の表情のない人形。それが今は――煤けたような漆黒に変色していた。

「……何？」

私は思わず扉に手をかける。

鍵はかかっておらず、扉はぎいと軋んで少し開く。

朝の光が祠のなかに差し込む。

「……えっ……？」

思わず息をのむ。

人形は、一体じゃなかった。奥に転がっていた。何体も、何体も。

新しい人形、古い人形。どれもこれも真っ黒だった。

古い物は、どのくらい年季が入っているのだろう。手足や頭がもげたりして、ボロボロに朽ち果てている。

「……っ」

声が出なかった。胸がぎゅっと掴まれる。

これが何なのかわからない。でも、異様な光景だった。

「なに、これ……なんで、こんな……」

私は扉を慌てて閉めた。

ボタンと大きな音がして自分の肩がびくりと跳ねる。

数歩後ずさる。心臓がばくばく言っている。

震える指でスマホを取り出した。

検索バーに文字を打ち込む。

「ケガレトリ」「神社」「都市伝説」「人形」。

古いまとめサイトにたどり着く。寂れた個人ブログだ。

20年以上前の過疎掲示板のログ。その中の、たった一つの書き込み。

『ケガレトリで神になるってのは、つまり人柱になるってこと』

血の気が引いた。

スマホを持つ手が震えはじめる。

「人柱……？」

震える声が漏れた。

あの人形は。ケガレを浄化され——神になった人間？

「うそ」

ぱっと顔を上げた。

「うそでしょ。うそだよね？」

私はもう一度祠を振り返る。

扉の隙間から黒い人形がこちらを見ている。

「ありえない。ありえないよ。人間が人形になるなんて……」

膝が笑う。冷たい汗がこめかみを伝う。

「ここから去らなきゃ。今すぐに」

私は声に出して呟いた。もつれる足をなんとか前に動かそうとした。

そのとき。スマホがぶると震えた。

「ひっ！」

反射的に画面を見る。通知画面にはこう表示されていた。

『あと一つケガレを被えば神になれます』

「あ……ああ……あああ………！」

「いやああああああっ！」

私はスマホを神社の石畳に思い切り叩きつけた。

画面が割れる音がした。

そのまま私は、振り返らずに走った。

参道を駆け抜ける。砂利が靴底で跳ねる。

自転車のグリップを握りしめ必死に漕ぎ出す。振り返らずに、一心不乱に。

なんで？　なんで私が選ばれたの？

——いや、違う。選んだのは……私自身だ。

私が、神になることを選んだ。同意のボタンを押した。その本当の意味もわからずに。

息が上がる。胸が痛い。涙が頬を伝った。振り払うように私は家まで走り続けた。

家に着いたら玄関で靴を脱ぎ捨てて自分の部屋に駆け込んだ。

ドアを閉めて内側から鍵をかける。カーテンを引く。電気を消す。そのままベッドで布団を頭まで被る。

「だいじょうぶだいじょうぶ……」

「だいじょうぶだから……」

呪文みたいに繰り返した。

スマホはもうない。神社で壊して捨ててきた。だからもう、大丈夫。

あの場所から離れればもう大丈夫。二度と近寄らなければ大丈夫。

明日になればぜんぶ忘れる。

明日になれば、いつもの日常に戻るから――

震えながら、私の意識は闇に溶けていった。

五

「ん……」

いつのまにか私は眠っていたらしい。

まだ判然としない意識の中、自分の手に何かが握られているのに気付く。

「ひっ！」

息が止まる。

——スマホだった。画面がバキバキに割れた、私のスマホ。神社に捨てたはずの私のスマホ。

画面には『ケガレトリ』のアプリ。そこには、こう表示されていた。

『最後のケガレを祓いますか？』

「わああああああっ！」

反射的にスマホを放り投げる。壁にゴンとぶつかって、床に落ちる。

私は逃げ出すように部屋を飛び出した。

「葵、どうしたの？」

答えず、サンダルを引っかけて家を飛び出した。

遠くへ。どこか遠くへ。

自転車を走らせる。神社とは正反対の方角へ。

しかし――

気付けばそこは、神社の前だった。

「……なん、で……？」

慌てて反対方向に自転車のハンドルを切る。

自転車を走らせる。逃げるように。ひたすらに。

三十分も走っただろうか。息も切れ切れに、ようやく止まる。

息を整えて、顔を上げる。

――目の前に神社の鳥居があった。

「うそ……うそうそうそ……」

声が震える。

私は回れ右をして、また逃げる。

タクシーを見つけた。手を上げるとすぐに止まってくれた。

自転車を放り投げ、車内に転がり込む。

「▲▲駅まで……お願いします」

「はい、▲▲駅ですね」

運転手は優しい声で応えた。

車が動き、窓の景色が流れ始める。

心臓が少し落ち着く。電車に乗れば、遠くに行ける。遠くへ、どこか遠くへ――

——車が止まる。

「お客さん着きましたよ」

私は、すぐに扉を開けて外に飛び出した。

そこは——神社の前だった。

「あ……う……」

「ち、ちよつと運転手さん……ここ——」

振り返ると、運転手さんはいなかった。それどころか、タクシーもなかった。

「ふざけないでよ……」

「ねえ……ふざけないで……」

街じゅうの道ぜんぶが神社に通じていた。

走っても。

乗っても。

隠れても。

——世界そのものが私を神社に運んでくる。

私はその場にしゃがみ込んだ。

やがて日が沈む。夜の闇が辺りを包む。

六

気付けば私は、参道に立っていた。

「……逃げられないってわけ？」

誰に聞いているのかわからない。

誰も答えなかった。

見えない糸に引つ張られるように砂利を踏みしめて私はゆっくり歩き出した。
境内は真つ暗だった。

街灯はない。月も雲に隠れている。

木々の葉ずれの音だけがざわざわと囁いている。

私はフラフラとした足取りで奥の祠へ向かって歩く。

砂利を踏む音が自分の足の下から響く。

——遠くにぼつんと明かりが見えた。

祠の前で光っている。煌々と輝く、人工的な四角い光。

……近くで確かめなくても、わかる。あれは——

壊して捨てたはずのスマホだ。

「……………」

空気が冷たい。息が白くにじむ。

——これは、夢？

スマホの画面に文字が浮かんでいた。

『最後のケガレを祓いますか？』

「いやだ……」

声が震えた。

「いやだ、いやだ、いやだ」

「ケガレなんて祓わなくていい……」

「神様になんかなりたくない……！」

涙がぼろぼろと零れ落ちる。

「誰か……助けて」

「お母さん……」

そんな言葉とは裏腹に、足は前に進む。ゆつくりと、確実に。

気がつくといびきだらけのスマホを手を取っていた。

手の震えで、画面もブルブルと震えている。

見たくない。触りたくない。でも、私の手は勝手に動く。

そして――

画面が切り替わった。

『最後のケガレそれは「あなたの恐怖心」です』

『最後のケガレを浄化してあらゆる恐怖から解放されましょう』

「……恐怖から……解放……？」

ああ、そうか。

この気持ちは、私の中のケガレなんだ。

——こわい。——逃げたい。——隠れたい。

——許して。——来ないで。——放っておいて。

……いらない。こんな感情。今すぐ捨てたい。楽になりたい。

なんだっていい。この恐怖が消えるのなら——。

私は「はい」を選んだ。

震える指がそのボタンを押した。――ゆっくりと。――力強く。

「……あ」

ふっ――と、体から何かが抜けた。こわばっていた全身が、柔らかくなってゆく。体の震えが止まった。指先まで温かい何かがゆっくり満ちていく。

数秒前までの恐怖が嘘のように消えた。

全て洗い流された。恐怖も、なにもかも。

「自分」という輪郭も。静かに溶けていった。

スマホの画面には最後の一文が表示されていた。

『おめでとうございます』

『あなたは神になりました』

私は微笑む。

穏やかに。完璧に。

「ありがとうございます」

「私は、神になりました」

祠の扉を開けて暗闇に潜り込む。

冷たい床に寝そべり、私はそっと目を閉じた。

とても暖かく、幸福な気持ちに包まれながら。

――それからほどなくして。

祠には、真新しい真っ白な人形が供えられていた。

ぽつんと、たったひとつだけ。

その後ろの暗がりには無数の黒い人形が転がっている。

参道を見知らぬ女子高生がひとり自転車を押してやってきた。

うつむき気味の表情で制服のスカートの裾をしきりに気にしている。

彼女もまた何かに悩み何かを変えたいと願ってここまで来たのだろう。

少女は祠の前に立ち、スマホを供える。

両手を合わせ、そして唱える。

「祓ひ給へ、清め給へ、我が穢れを喰らひ給へ」

鈴の音が祠の奥から響く。

真新しい白木の人形が、

新たなケガレを、

飲み込みはじめる。

【完】